拝啓、諭吉様。

もし現代の若者が
『学問のすすめ』を学んだら

永松茂久

すばる舎

幻章

人生をダメにする
ふたつの感情を知る

諭吉さんと美桜と民謡のおばちゃん

緊急の呼び出し

夕方に差し掛かった16時過ぎ、携帯が鳴った。美桜からだった。

「おつかれ。どうした？」

「元ちゃん、いまどこにいる？」

「中津城だよ。諭吉さんと一緒」

嘘をつくことなくこう言える相手がいることが、なんとも嬉しかった。

「あのさ、さっき市場が終わって仕込みに来たんだけど、なつみママが体調悪そうだから、帰ってもらったんだよね。だから今日、店は私が回すことになったんだけど、厨房は私がやるから、元ちゃん、表を手伝ってくれないかな？」

「わかった。すぐ店に行くよ。今日、予約は入ってる？」

「うん、3人だけど奥の個室に通すつもり。できればすぐ来てね。じゃーね」

そう言って美桜は電話を切った。

「どうした？　なにかあったのかい？」

「いえ、ちょっと母が体調が悪いらしくて僕が店を手伝うことになりました」

「そうか、それは大変だ。では店に行きなさい」

昨日、母はめずらしく早上がりした。そして今日も体調が悪いらしい。風邪でも引いたのかな？　それまではどんなときでも店を休むことはなかった母だったので、少しそれが気にはなったが、「ま、オカンは丈夫だから大丈夫だろう」、そう思いながら僕は「桜」に向かった。

変わった組み合わせの居酒屋「桜」

「いらっしゃい、あ、おばちゃんどうしたの？」

「どうしたってご飯食べに来たんだよ。悪いかい？」

17時。「桜」の開店と同時に民謡のおばちゃんが入ってきて、ぶっきらぼうに僕にそう言った。

「あ、おばちゃんこんばんは。電話ではどうも」

「あらー、美桜ちゃん、相変わらずかわいいねえ。ところで元、なつみちゃんは？」
「オカンはちょっと体調崩して今日は休み」
「あ、そうかい。もうあの子もいい歳だからねえ。早くあんたたちが楽させてあげないとね」
そう言いながら、おばちゃんはにこにこしながらカウンターにいる諭吉さんに声をかけた。
「諭吉先生、元がお世話になります。お隣いいかしら？」
「いや、おばちゃん、それは…」
「いいじゃない、私は黙って話を聞くだけだから」
僕が諭吉さんに気を遣っておばちゃんをちょっと離れた席に案内しようと思ったが、諭吉さんが「いいよ、どうぞどうぞ」と笑顔で迎えたことで、おばちゃんは諭吉さんの隣の席に座った。そのやりとりを特に不自然に思うそぶりも見せず、厨房では美桜がせっせと仕込みをしている。
この頃の美桜は、接客だけでなく、料理からお金の管理までなんでもできるようになっていたので、母も安心して店を任せていた。「美桜ちゃんは本当に味付けのセンスが抜群」と母が感心するくらい、美桜は確かに料理が上手だった。

諭吉さんはすでに席に座って麦焼酎を飲んでいた。今日の講義はお堀で終わったと思っていたが、「からあげをもう一度食べたい」ということで、諭吉さんも僕と一緒に「桜」に来たのだった。
予約席の札が置かれた席に麦焼酎が一杯だけ置いてある。そしてそのうち美桜が揚げているからあげが置かれることになる。その状況を見たお客さんは「なんであそこにからあげと焼酎が置かれているんだろう？」と不思議に思うに違いない。
美桜が電話で言った予約のお客さんは18時来店予定。フリーのお客さんが来ない限り、それまで店にいるのは諭吉さん、美桜、民謡のおばちゃん、そして僕の4人。
美桜は諭吉さんの声は聞こえないものの、その存在についてはもうすでに知っている。加えて民謡のおばちゃんは霊能力があるから諭吉さんと会話ができる。そして予約のお客さんは奥の個室。
他のお客さんが来ても、僕とおばちゃんが話しているという設定にすれば、カウンター越しに諭吉さんと話していてもそれほど不自然ではない。そう考えたらおばちゃんが諭吉さんの隣の席に座ってくれるその状況は、僕にとってはかえって好都合だった。
美桜が今日は鶏鍋を準備していた。その理由は「鍋なら湯気が出続けてずっと諭吉さん

が食べることができるから」という理由だった。それを聞いた諭吉さんは美桜の心遣いに感動していた。

学べと言ったもうひとつの理由

「中西くん」から「元」へ

19時から店がピークを迎え、僕と美桜がドタバタしている間、民謡のおばちゃんと諭吉さんは何やら楽しそうに話していた。

そのままにしておくと、周りから見ると民謡のおばちゃんが独り言を言っているように思われてしまうので、おばちゃんに携帯を持たせ、イヤホンをつけてもらった。

お客さんが増え、店が賑やかになっていき、おばちゃんの声もだんだん大きくなっていったが、その声も他のお客さんの声の中に溶けていき、特には気にならなくなっていった。

ピークを越え、ある程度お客さんも帰って店が落ち着いてきた頃、僕は諭吉さんとおばちゃんが座っているカウンターの前に戻った。よほど楽しかったのだろうか、諭吉さんは

昨日よりも酔っぱらっていた。

「元、君も飲みなさい」

僕は諭吉さんからお酒をすすめられた。「中西くん」という呼び方は、いつの間にか「元」になっていた。それが妙に照れ臭く、また嬉しかった。

「いただきます」

喉が渇いていたため、僕は生ビールを一気飲みした。

「今日もからあげうまいな。3皿食べた」

お酒で顔が赤くなった諭吉さんは笑顔でそう言った。

「諭吉さん、ほんとからあげ好きなんですね。喜んでもらえて嬉しいです」

「商売繁盛大いに結構だ。しっかり稼がないとなあ」

「いやあ、諭吉さん。居酒屋って労力の割にはそんなに儲からないんですよ。本当に世の中のお金持ちがうらやましいです」

僕のその言葉に反応したのか、ちょっと何かを考えてから諭吉さんは突然僕に話し始めた。

生きていく上で一番セーブしなければいけない感情

「元、今日私は君に自立しなければいけないと話したな」
「はい、とても勉強になりました」
「言い忘れたが、実はそれにはもうひとつの理由がある」
「もうひとつの理由？」
「そう、人にはいろんな感情がある。その中でふたつだけ、持ってはいけない、いや、たとえ持ったとしても絶対に自分の中で制御しなければいけない感情がある」
「ふたつの感情…、それはなんでしょうか。あ、諭吉さん、ちょっとメモを準備するので待ってくださいね」
　僕は携帯を出し、メモを準備した。
「はい、お願いします」
「その感情、それは『妬み』と『恨み』だ」
「『妬み』と『恨み』…」
「いま君はお金持ちがうらやましいと言ったな」
「いや、あの、特にそんな深い意味はないんですけど」

「いまの時点ではその程度かもしれない。しかしその因子はやがて芽となり、生い茂り、心の雑草になる可能性が大だ。その感情がやがて大きくなる前に君に伝えておかなければいけない」
「はい」
「『妬み』とは『うらやましい、なんであの人ばかりが得するんだ』という羨望（せんぼう）、そして『恨み』とは『あの人だけは絶対に許さない』という怨望（えんぼう）だ。そのふたつの感情は多くの場合、嫉妬心を起点にして生まれる。そして人は誰も、大なり小なり本能的にこの嫉妬の感情を持っている。ただ問題はそれを自分の中で上手にコントロールできるかどうかだ」
「それって僕の中にも多分にあります」
「人は多くの欠点を持つ不完全な生き物だ」
「はい、わかります」
「その中でも特に気をつけなければいけない大きな欠点、それが『妬み恨み』の感情だ。この感情ほど人間関係において有害になるものはない」
　僕はメモを取りながら、それまでの自分を振り返っていた。民謡のおばちゃんも諭吉さんの言葉に深くうなずきながら話を聞いている。

「妬み恨み」は自分も他人も破滅させる

多くの欠点の裏には長所がある

諭吉さんは続けた。

「もちろん世の中には欲深くてケチな人、金遣いの荒い人、気がつけばいつも人の悪口を言う人がいる。嘘つきもそうだ。もちろんこういった癖も『妬み恨み』の感情と同じように、欠点と呼べるものなのかもしれない」

「なんかそれらもすごくよくない気がするんですが」

「それは確かにそうかもしれない。しかし、**人間というものをよく見渡してみると、それらの欠点には、結果として悪いだけではない側面もあることが多い**」

「どういうことでしょうか？」

「その感情を出す場所の適切さや強弱の度合い、方向性など、見方によっては必ずしも欠点とはならない場合もある」

「そうなんですかね、僕には欠点にしか見えませんが」

「そうか。では例を挙げよう。例えばいつも人の悪口を言っているように見える人がいたとする。しかし、それだけで『あの人はダメだ』と決めつけてしまうのも、また早とちりになってしまうことがある」

諭吉さんの言葉で、高校生のときに死んだ父のことを思い出した。なんのとりえもなかった父ではあったが、「元、いいか。どんなことがあっても人の悪口だけは言うな」と教えられ、実際に父自身も決して人の悪口は言わなかった。その部分は唯一尊敬していたところだったので、父から教えられたことの中で、それだけは守っていた。

だからこの話に関しては、すんなりと諭吉さんの言っている言葉が入ってこなかった。僕はそのことを正直に言った。

「本当にあんたの父親は破天荒な子だったねえ。どうしようもない部分もたくさんあったけど、そう言われれば確かにあの子は人の悪口だけは言わなかったね。いまごろ向こうの世界で何をしてるんだろうねえ」

隣でその話を聞いていた民謡のおばちゃんが、父を思い出しながらぼそっと言った。

嫉妬心はトラブルの母

「君のお父さんの言うとおり、それが単なる悪口ならば絶対に言わないに越したことはない。しかし、ひょっとするとその人が言っていることは、単なる悪口ではなく、ダメな部分を指摘し、改善策を訴えようとしているのかもしれない」

「確かにそうかもしれません。ではそういった批判は別としても、嘘や偽りだって人を陥れる可能性がありますよね？　それって『妬み恨み』と同じくらい悪いことじゃないんでしょうか？」

僕は諭吉さんに素直に疑問をぶつけた。

「一見そのとおり。しかし、その場合、嘘偽りの因果関係を整理すると、その善し悪しははっきりする」

「因果関係？」

「そう。嘘をついた動機のことだ」

「なぜそうしたかということですか？」

「そのとおり。もちろん嘘偽りは言わないに越したことはない。しかし、それは必ずしも『妬み恨み』から生まれるものばかりではない。例えばその嘘が相手の尊厳を守るためだったり、その場をうまく収めようという配慮から生まれるものもある」

なるほど。確かにそう言われれば、それがいいか悪いかで言えば、その背景によって変わることもある。「嘘も方便」という言葉もあるくらいだから。

「このように悪口や嘘偽りには、その裏にその時点での状況を前に進めるための理由が潜んでいることがある。しかし『妬み恨み』という感情に関しては、その裏をいくら考えても、状況を前に進めるものは何もない」

「なるほど」

「人間の嫉妬心とはもめごとの母のようなものなのだ。この嫉妬心がやがて『妬み恨み』を生む。そしてこの感情がむき出しになると、人間関係のいさかいが起こる。『妬み恨み』、これこそが人間社会において、大きな災いをもたらすすべての原因となるのだ」

「妬み」と「恨み」。諭吉さんが教えてくれたとおり、できる限り意識してこの感情をセーブできるようになろう。僕はそう思った。

諭吉さんのお金論

ケチと倹約は紙一重

「君は昨日、私に『僕はお金持ちになりたい』と言ったね」

「はい、なんか程度の低いことを言ってすみません」

「そんなことはない。本来この世の中にお金が嫌いな人などそうそういない。ただその感情を表に出すかどうかの違い程度でしかない」

少しホッとした。

「あの、諭吉さん。学びが大切と言われましたが、お金のことを学ぶというのは…」

「もちろん大切なことだ。これは学びの重要性という意味では上位5つに入る」

「上位の5つ。それくらい大切なことなんですね」

「そう。**そもそもお金が好きなのは人の本能のようなものだ。その本能に従って一生懸命働くことができるのであれば、それは必ずしも欠点とは言えなくなる。お金のことを悪く言うのは、海の中で生きている魚が水をバカにするようなものだ**」

諭吉さんのそのたとえが僕の中で妙にツボにハマった。

「つまり、お金を求める人を見ただけで、それをすぐに『あの人はダメだ』『あの人は守銭奴だ』と決めつけると、思わぬ早とちりになってしまうことだってある」

「お金を追いかけている人を見るとどうしてもそう思ってしまいます。なんというかカッコ悪く見えるというか…」

「それは君の誤解だ。お金を正しく管理し、無駄遣いをしないようにすることができる人のことはケチとは呼べない。むしろ『倹約家』とか『経済感覚の優れた人』という風に表現すべきだ。その在り方は、多くの人が学び、目指すべき美徳と呼べるものだ」

モノの奴隷

「お金の使い方に関してはどう考えればいいですか？　僕、欲しいものがたくさんあるんです。まだ買えないですけど」

「ちょっと脱線するかもしれないが、お金について話していいかな？　短めにするから」

「全然短くなくていいです」

僕は本音を言った。

「もちろんお金を使うこともその限度を超えなければ問題はない。人間が快適な生活を望むのは自然なことで、その範囲内で贅沢を楽しむことは人間の楽しみのひとつになるし、そうすることによって経済は活性化する。その循環は人間にとって理想的なお金の付き合い方ということになる」

やった。オーケーが出た。僕、がんばってお金持ちになろう。

「しかし、だからと言って、モノの奴隷になってはいけない」

モノの奴隷。また新しい言葉が飛び出してきた。諭吉さんはその言葉に続けてこんな話をしてくれた。

「元、君は『一杯であれば、人が酒を飲む。三杯になると酒が人を飲む』ということわざを聞いたことがあるかい？」

「いえ、ないです」

「そうか。これは私が生きている頃によく使われていた言葉だからな。これは酒だけのことを言っているのではない。**欲が心を支配しすぎると、心の自立が保てなくなる**ということを戒めるための言葉だ」

なるほど。ところでそう語る諭吉さんはいったい今日何杯飲んだんだろう？　そこはあえて突っ込まずに、僕がさりげなく替えた麦焼酎の湯気をすすってから一呼吸置いて、諭吉さんは話し始めた。

「例えば自分が持っている服が気に入らず、新しい服を買う。すると、その服と持っている靴が合わないと今度は靴を買い集める。服と靴があふれると、家が狭くなり、大きな家に引っ越す」

「それができるってこと自体、僕にとってはうらやましい限りです」

「それがそうでもないのだよ。この状態は無間地獄の始まりとも言える」

「地獄？」

諭吉さんはしみじみとそう言った。

「先ほどの続きを言おう。大きな家に引っ越すと今度は人を集めて宴会がしたくなり、その場所では足りずにもっと大きな家に引っ越す。すると今度は料理人を探すために一流店に出入りするようになる。結果的にまた余計なお金を使い続ける。するとどうなる？」

「やがてお金がなくなります」

「そういうことになる。このように人の欲は次から次へと芋づる式に広がっていくのだ」

「欲望ってエンドレスなんですね」

「ある程度のところで満足することを知らないとそうなる。これは物欲が人の行動を支配

し、本来はモノの主人であるはずの人間が、気がつけばモノの奴隷になってしまっている状態と言える」

他人を生きるな

「まあこれは、自分が稼いだお金を自分で使うだけだからまだいいとして、**度を越えると、やがては他人を生きることになってしまう**」

「他人を生きる。それってどういうことですか？」

「他人のモノの奴隷になる人がいるということだ。例えば『あの人が素敵な洋服を着ているから自分も買おう』となったり、『隣が2階建ての家を建てたから、自分は3階建ての家を建てなければ』という状態だ。周りの人の買い物が自分の買い物の見本になり、結果的にお金を使い果たしてしまうことになる」

なるほど。それが他人を生きるという意味なんだ。これはつまり欲の基準が「自分が満足できるか」ではなく、「他人から見てかっこいいかどうか」にすり替わってしまうということだ。確かにそれでは自分の人生を生きているとは言い難い。

「そもそも財産をつくるのは、自分が経済的に自立するための土台を盤石にするためだ。それはもうわかるよな？」

「はい。僕は今日、そう誓ったので。とはいえまだスタートラインに立ったばかりですが」

「最初は誰もがそう思ってがんばるのだが、いつの間にかモノや他人に心を支配されてしまうと、やがて自立の精神を失ってしまう」

「僕が言うのもなんですが、それって本末転倒ですね」

「そのとおり。**私はなにも行き過ぎた倹約や守銭奴になることをすすめているのではない。お金についてしっかりと学び、その使い方をよく考えて工夫する癖を身につけることが大切だ**と言っているのだ。お金に支配されるのではなく、お金を支配せよ。お金からの自立も学ぶ者として忘れてはいけない」

お金からの自立。この話をまだお金を稼ぐ前に聞いていてよかった。僕はそう思った。

「妬み恨み」は人生を破滅させる

「先ほどの話に戻るが、一見ケチに見える人の裏側には、実は倹約という善の側面がひそんでいる可能性があるということはわかったかい？」

「はい。よく理解できました」

「しかし『妬み恨み』はこれらとは異なる。状況や方向性に関係なく、その感情だけは、いくらひっくり返して考えようとしても、この言葉自体には後ろ向きな意味合いがつきま

とう。どう探しても前向きな要素が見つからないのだ」

なるほど。そう言われれば確かに『妬み恨み』はどうひっくり返しても、それにふさわしい言葉が出てこない。

「そしてこの**『妬み恨み』が募れば募るほど、人は無意識に人の足を引っ張るようになる**」

「人の足を引っ張る…」

「そう。自分を高めてその人に追いつこうと考えるのではなく、相手を引きずり下ろすことで、自分の立ち位置を高めようとするのだ」

「そう考えると、なんか怖いですね」

「これが『妬み恨み』の本質だ。この感情で生きている人の不満を満たそうとすることは、世の中全体の幸福の総量が減っていくことになり、結果的に何もいいことなどない」

他人ではなく目の前にあることに集中する

同僚への劣等感

ではそもそも人はなぜ人を妬み、恨むのか？　どうすればその感情をうまくコントロールできるのだろうか？　その解決策を諭吉さんに聞いてみた。

「そもそも**『妬み恨み』が生まれるのは、自分の行き詰まり感が原因**だ。その行き詰まり感さえ取れれば、すべてが解決する」

「行き詰まり感…、ですか？」

「そう。自分の人生がうまくいっているとき、人はそうそう他人に嫉妬はしない。自分の自由が束縛されたとき、人は行き詰まるのだ」

「それは例えばどんなときでしょうか？」

「うん、では君に当てはめて説明しようか。例えば、同僚で出世した人がいたとする。しかし、その出世は運がよかっただけかもしれないし、たまたま得意な仕事で成果を出せたからかもしれない。人の成功にはさまざまな要因があるからな」

「あの、諭吉さん。当てはまりすぎて怖いんですけど。どこまで僕のことを見てるんですか？」

実はその頃の僕は、営業から社内の人間関係までなんでもそつなく器用にこなし、上司の信頼を独り占めしている同僚に、言葉にできない劣等感を抱えていた。

「お、それは見てないな。そんな人が実際にいるのかい？」

「はい。寸分の狂いもなく、そのたとえのまんまです」
「そうか。それは偶然だったな。まあいい。例えばその彼の行動を分析してそのまま真似したからといって、必ずしも君がうまくいくとは限らない。だからただ遠くからうらやましく思うしかなく、だんだん不自由に感じ始める」
「あの、当てはまりすぎて、僕、だんだん心が痛くなってきたんですけど」
「それは誰にでもある感情だ。しかしこれも程度の問題だ。度が過ぎると君の劣等感はやがて『妬み恨み』に変わる。その同僚を妬み、世間の不公平さを嘆いてばかりいると、自分のやるべきことなど見えなくなってしまう」
「どうすればその行き詰まり感から抜け出せるんでしょうか？」
「まあ待ちなさい。それを君に教える前に、もうふたつ例を挙げよう」
早く答えが欲しい。しかし諭吉さんがそう言うからにはなんらかの意味があるのだということはもうわかっていた。ひょっとすると、僕の理解度をさらに深めるためなのかもしれない。僕は黙って聞いた。

やがて勝つ人、ずっと負け続ける人

「君は部活動をやっていたかい？」

「はい、中学校と高校はテニスをやっていました。上手ではなかったので、高校の途中でやめましたけど」
「ではテニスでたとえよう。君はテニスをするとき、何に集中する？」
「えっと、ボールですかね」
「そうだね。しかし、もしプレイの最中に得点掲示板ばかり見ているとその勝負はどうなる？」
「えっと、ボールに集中できないのでたぶん負けます」
「そうだよな。ではもうひとつ。この前、例に出した『ウサギとカメ』。あのウサギは何で負けたんだと思う？」
「寝たからです」
「違う。カメを見たからだ」
「え、そうなんですか？」
「カメを見て油断したから寝たのだよ。つまりは何が言いたいかわかるかい？」
何が言いたい？　えっとその例をもう一度考えてみると…、あ！
「僕が他人ばかりを見ているということですか？」
「そのとおりだ。よく気がついた。これは私が教えたことではなく、君が気がついたこと

だ。学びの最上級、それは教わるより気づくことなのだ」

なるほど、だから諭吉さんは僕が答えを出しやすいように例を挙げて導いてくれたのか。どこまでも深い人だ。僕は答えを見つけた喜びもさることながら、諭吉さんの心遣いに感動していた。

「**行き詰まり感から抜け出す方法。それは他人を見ることをやめ、まずは自分の置かれた立場で成果を出すことに集中する**、それが一番正当で健全な方法だ。それさえできれば君はやがて勝つ人になれる」

「なるほど、そういうことなんですね。行き詰まっていたのは僕自身に原因があったんですね」

「そう。自分のやるべきことを棚に上げて他人をうらやみ続ける人は、いつまで経っても行き詰まり感の中から抜け出せない。そしてやがては自分の自由を妨げる人を無意識のうちに引きずり下ろそうとするようになる。こうなるとその人は、ずっと負け続けの人生を送る羽目になる」

いま気がついたばかりにもかかわらず、いつも人をうらやんでばかりいる人のことを想像して気の毒になってしまった。

「そんな人生は、いくらその人の見かけが派手であろうが、決して幸せなものとは呼べない。むしろ現代人の形を整えただけの精神的原始人とも呼べる」

君よ、自分を行き詰まらせないために学び続けよ

諭吉さんは話をまとめた。

「人間の最大の不幸の原因、それは『妬み恨み』の感情であり、行き詰まり感から生まれる。その行き詰まりを生まないためにも、まずは自分のやるべきことに全集中して、一日も早く自分を成長させる。そして自分に起きるすべての結果に対する責任を自分で引き受ける覚悟を持つことが何よりも大切なことなのだ」

「はい。まずは自分のやるべきことに集中します」

「覚えておきなさい。**『妬み』と『恨み』。このふたつの感情を持って君の得になることなど何もない**ということを」

なんか心が軽い。僕が同僚を見て行き詰まっていた部分を諭吉さんが「スポン」と抜いてくれたからだろうか。

「他人に妬みを抱くことなく、互いに正々堂々と競い合い、それぞれが自立して自分の幸福を追求することが、社会の健全な発展につながる。その社会の実現のためにも君は学ば

なければならないのだ」
「ありがとうございます。僕、さらに学びます。ありがとうございます！」
諭吉さんはそんな僕を見て嬉しそうにうなずいた。その横で話を聞いていた民謡のおばちゃんも「元、よかったね。がんばりなさいよ」と、目に涙を浮かべて喜んでくれていた。
よくよく考えると、急遽店に出なければならなくなった僕が、営業中、諭吉さんに気を遣うことなく、結果的にこの話を聞けたのはおばちゃんがいてくれたおかげだ。おばちゃん、今日はいてくれてありがとう。僕は心の中でそう感謝した。

美桜という宝

美桜の花

「あー今日も終わった！　おばちゃん、一杯もらっていい？」
その後、諭吉さんからもらった言葉を振り返っていると、片づけを終えた美桜がカウンター側に立っていた僕の隣に来た。
「美桜ちゃん、待ってたよ。一緒に飲もう」

民謡のおばちゃんは嬉しそうな顔をして美桜にそう言い、美桜は自分で生ビールを注ぎながら言った。
「元ちゃん、どうしたの？　さっきまで表情暗かったけど、なんか元気だね」
「うん、まあね」
「諭吉さんに怒られてるのかと思って心配した。あ、おばちゃん、そして見えないけど諭吉さん、いただきます」
そう言って美桜は美味しそうにビールを飲んだ。
「お、いい飲みっぷりだね。美桜ちゃん、今日は私の奢（おご）りだから好きなだけ飲んでいいからね」
「いやーん、おばちゃん。私そんなに飲んだら酔っ払っちゃう」
〝嘘つけ。俺の10倍は強いくせに〟
これまで同じペースで飲んで、僕が美桜から介抱してもらったのは一度や二度のことではない。
その後、美桜は民謡のおばちゃんと話しながら、同時に諭吉さんにも話しかけ、諭吉さんの言葉をおばちゃんに通訳してもらいながら楽しく笑っていた。輪に入った瞬間、その

場所に一気に花を咲かせる。美桜は幼い頃から、そんな不思議な明るさを持っていた。
「美桜、元気だね。その性格がうらやましいわ」
大きな声で屈託なく笑う美桜を見て、僕は思わずそう口にした。
「あ、元、あんたさっき聞いたそばからもう人をうらやんでるじゃない」
おばちゃんに突っ込まれた。
「そうだよ、元ちゃん。人をうらやんでばかりいても何も始まらないよ。いつもそうやって自分のことを卑下して暗くなっちゃうんだから。そんなことよりほら、飲んで。いまを楽しくいこう」
さっき諭吉さんが教えてくれたことを美桜から一瞬でまとめられた気がした。
「この子は本当に生き方の本質がわかっている。元、何があってもこの子は大切にな」
諭吉さんが美桜を見ながらしみじみそう言った。
「いえ、単なる幼なじみなので」
照れもありそう答えたが、そこから先も僕は美桜のこの明るさに何度も助けられることになる。

結局、美桜とおばちゃんの話はその後も止まらず、その日は午前様になった。

しかし本来朝型のはずの諭吉さんは、まったく眠そうな素振りも見せず、楽しそうに二人の話をずっと聞いていた。